

新
り
月
日
記

後
篇

特別
~ 13
4268
7



113
4268
7

朝顔日記卷之五

故芝叟遺話

柳浪 著

十一回 諫

世の常言よふぬる。會ハ別きの端とやらむ。秋月の
 女見深雪へ、とらざるも日頃慕へる阿蘇次郎と。明
 石の浦の船の上にて。邂逅の環會。二世のちきり
 約し。即時情郎またたぐひて。奔り去人と支度せ
 ば。事ありてその船。おはうは駛出せしむへ。あつろ
 ぬらざるも。父弓之助と共に筑紫の下に。落陵の
 小歸住。深室の閉籠にてぞありける。物たもふ身
 こそが故郷の天から。旅おしよまざる憂に耐て。

高平堂



朝顔日記 卷之五

91-2162

背ハいつ小ねをたまひけん。さぞかこらハと。誠ふたもの
 とやねぼそらん。這方ハ一とぢよ戀ひ来一もの哉。
 誓ひてし。かぬおとハとや忘もやまたまひけん。即君
 ハ情多きものとしきけバ。宮古の花よりつろひまし
 けんこそ。腹だしいけまふど。とごまかうごまふふく
 たもひのびまっ。夢をばはしきうに寐鳥。あこ小音に啼
 難面よ。いとくかこしく袖が浦。いつハ君よ。藍の島
 海の中道ふくく。お。蕨老松林風絶て。そよとば
 其の信もねし。かくまであくぐをたるほも。おやあ
 了けん。早晚心地とへ例ふらず。三伏の熱き日。も常
 かなぐ。簾罩てのそ過しける。深雪ハ今宵了。髪浅香
 お吩咐て。簷端の簾子ふごてねく捲せ。端らうく居
 て。欄于小靠を。せめてもの心や。おと。外面とらう。眺
 をバ。及時池の蓮花の盛開ぬる。えからぬ飛香の
 陣くくびく。鼻と撲来。いと清らかる水。の渾ふき
 バ。夜の更るふまどがひ。何とねく露けくおぼさる。水
 草の葉未よ。秋の螢の四個五個むう。いとよ。ハ
 ま。く飛ふ。あ。と。ま。と。ね。が。ら。青。き。光。ど。も。の。滅。つ。て。さ。る
 ぞ。もの。こ。び。く。と。う。ね。げ。ぬ。あ。は。ま。ね。り。ける。と。ご。ろ。お。越。す
 の。ふ。の。む。を。て。看。も。の。聞。も。の。お。は。け。て。薄。酒。と。も。よ。は。す。せ
 と。ハ。ね。を。け。ら。し。

ぬき竹のふし まちの月もほのらきいづきば。ほどく
人の面影さへ幻よりうづびつ。塙根をそとく 蛩の切
く聞ゆるは。よしをぐら我よともふひてや泣あすらん。
過し明石の楫枕。月の下臥ひまもぬく。逢瀬おとこふ
萍の生憎嵐は吹散とま。夜にぬらぬ船くと。影はまたよ
有明のおけくふまずもくかま来て。よるべとかいつふの
うと身あくるはくしふとをらへて。たゞそが背子とたづね
とび。魂ハ雲井の餘所と翔。夢ハ関路の千里と往還と
もそまバ世とあぢとふと。時あててい身と怨どつげ。や
死てこつら。今般よ。生別離ほど悲ともものハあらじと。

上吉の詩よいひけんも。今こが上は比へけ。只管哀慕
の情おたへて。袖おく水と堰あへどとや。さても在鎌倉
の秋月弓之助い。女孩児がゆる情痴といえもあらず。こ
もどまたいつぞや。明石の浦の船の上にて。深雪が艶簡
りくものど海は投。志とて悲嘆は沉たる風杖は
あやしと。もーやいひかかせし。意中人のあてて。戀慕
の餘あせし。からんりたとい渠が志とふものハいうは
ごやぶとぬき人ぬきとも。よも駒澤が標致よ。いおよ
ばし。女孩児深雪ハ。とづらよ深窓よ。ひとぬき。眼
界また寛らむ。我四十年來天下よ奔走せし。かど。
いまど駒澤おとき。才貌双全たる人ぬき見ず。さまは

渠も一匹駒澤とあひ見るふいたらば、極めて推辞む
おといあらと。此趣状を縷々と書たくら一封の家
書と走卒を齎せていそぎ本國筑前へ差しける。路
陵なる秋月弓之助が邸小八、渾家の水青信くま、
良人の田主とまもる日、とその消息を待たびてお
まける。今日も奴が鎌倉より御使よまよまを
とて、了頭どもがその書函とこし出しぬ。水青良
人の書信をとりあげて、まづ平安とある小安塔、や
とら緘にききて熟く讀了。一たび悦び一たびハ
愁る面持ぬ。悦ぶもの、佳婚と得たるがゆへに
愁ふるもの、女兒が別な意中人ありて、はね戀慕
態を猜しあるまで。愁ひいひ出しぬ。いうぬる怯
事と仕出来ふんとおもひとろる故か。さるに
よまて水青いよく思案と凝し、いづを女兒を
論して玉成へん小八あつと。聴て乳媪の真柴と
套房にびよせ、うちひをりきて商議せ。了衆浅香
ハ少黙りの小て、隔襖よあまを漏聞。隨即深雪が蘭房
小走ちき。喘吁く小姐適間鎌倉より御音信のゆらひ
きハ、あろくのあとよとべると。一五一十耳語け。ハ深雪
ハ聞よ。胸はぶを呆れて半胸口を開らす。よの時浅香
ハ内房より呼きて起ちぬ。おとよ深雪ハいとこ
ち。原來かゝる憂事を聞んはしう。前宵の夢見のあ

かまつる。比先ハ君侯の御声ごこゑがよて、肚裏はらは深ぬ
詰号つぎごうは遇幾年月うひくわんげつの苦くるは病やま一が、不料ふし芭虬ばじう之進のしんが暴
小病せうびやうて亡なたる小ぞ、天幸てんしやう一頭の煩悶ぼんもんと除ぬのぞこもあ
るうへハとやく、情おぼへ即すなはは借老せきらうと、佛ぶつは祈いのて神かみは願ねがそ
まを力ちからよあたる二光にこう瓜うりとくア、おもひさや。今日けふ
の御書信ごんじゆんは駒澤殿こまざわのどのとやらん。新婚よめあひせよと強面ひがしなる
父ちちの命いのちせ自來おんじゆんこらハが身みよいふうく山盟海誓さんめいかいせい一い人
あてて、いりぬる義理約束ぎりやくそくのあると、露つゆむりても
猜あやしたまひで、こらハうまど允諾いんかくもせぬものな、こや許ゆる
配まきをふさせたまふとや。愛慈あいじぬきふささうと、往むか
年としハ君侯きんこうと恨うらみ今日けふハまた父ちちハ恨うらみ其儘そのままそこは倒たふと

ふし。夫おとこよあまをる。双ふたの袖そでと顔かほよねしめて、うくと啼な
出でしけし。ぬべて情なさけある女子むすめの態さまかまうし。母ははの水青みづあお
いふの舉動あそびとさし覗のぞき見て、旁そばよ人ひとぬきと幸さいとせ
きばらひぬぬし、深雪ふかゆきが房へやよ入いけをば、深雪ふかゆきハ慌あは
居ゐるどり、襟えり刷はくろひ泣なぬ顔かほよとせぬせとも。宛轉えんてんた
る愁容しゆうよう。正ただよまを玉顔たまかほ寂寞せきやくとして、涙なみだ闌干らんかんたてたと
いへる光景あかりさまぬる。水青みづあおハやとら。側そばぬる琴こととねしけ。
ちうぐとよまをひ。泣な吃くせる女児むすめが背せかひ撫なげ、道理ちうり
よくとの態言かまごころかく背せ丈ぢやうのひたる女児むすめとば。春はるまどに白しろ
慶子かきこめのぶとねしふし。見みよハうもぬき親心おんこころ母水青ははみづあおツム
やう。やよ深雪ふかゆきそのやうふしつらるハ、浅香あさかめが失口しやくして

婚姻のふと聞きしぬら人今まであらはよこといぬ
汝の肚裏は戀人のおはすおととハ、よくよ王も猜し
ぞや、たもひよらぬ今般のこと、汝ハ心は涼ぬ姻縁とや
たり、且夫の父上の御文と見ぬ、婿とつふハ鎮西の探題
六箇國の主大内介様の御家老、駒澤次郎左衛門殿とて
三千石の秩禄知、弓箭劍鎗把てハ、鎌倉一の武夫おは
よし、且文道よし、かゝる、萬の伎藝什成一個會せ
ぬとつふことぬ、刺世は希ぬる美丈夫よし、天稟て
眉清目秀、色ハ雪よし、白く、標致氣骨傑然ぬる人表
分る過とら、佳婿と得とるふとく、あの嚴確父上の、おの
やうな器量のみとまで、精細ふかせたまひき加、施の

駒澤殿の人品は賞ひ、御麾下の世胃かよ王、女児と
賜さん妹と妻さんと、かぐは王、懇望あり、かど、
駒澤殿いうぬるおとふ、一聚て固く辞さす、さきし
ハ、鎌倉中の風説おとバ、氷人も玉成ことおつつか
しと、躊躇し、おとこを月老の結むせたす、赤繩
ふや、這方よ王、いひ入るやいな、速に承知あり、とよ
さきバ、父上の命と畏え、しやく承引てたびぬ、さき
おとバ、親孝行、且ハその身の眞加ぬ、汝が戀人と
つふハ、比先宇治の螢持よてた、一たび見も、見
もふたる、宮城阿蘇次郎ぬ、のふとぬるべし、その人
ハ浪人といひ、別来弗も動静も聞ず、おとさる賣僧

秋目ら之助
 妻水青女深
 雪に捨失しも
 願して多方
 庭訓とくハ
 駒沢許嫁
 せんと賺中
 ところ



秋目ら之助
 妻水青女深

秋目ら之助
 妻水青女深

難庵めが騙局など、百般の障却ありき。かゝる艱難
あるハ、必竟おま縁の無が故らん縁ある時ハ千里の
外もあひ遇からひ、恰ど今般の駒澤どののくどく、いら
そやく事勻こそ、赤繩のありとつゝ證據かま、おの
利害はよく辨明よ、鬼よも蛇よもあらぬ母がなでう
無仁の處置はねとべき、さハあま蓋といへおバ理が
聞えぬといふ世の諺、縁有無の縁由とつゝハ、現在の此
母が身の上、十八年来はく、そ来しも、今愛子の可憐
よ、愧れをこもてかゝるぞよ、こもいまど少艾一に
乳母が媒小よ、て、瀬氣のいたるの、後先見ず、母家
の間壁ぬる、此生主水とつゝ、武士小人志とず契と

あめ、未の松山浪あすとも、互の盟ハ違一と、もろとも
ふ、ふうくねもひーあ、一年餘と過せーうち、汝の為に
ハ祖父君、こが父宇佐美弥五右衛門殿、一日御城よ、王
退朝たまひ、母上よ仰すやう、今日ハ不圖御前よ、て
君侯某とちうく召ま、汝が女兒水青、こや桃大のひろ
ふまバ、幸秋月弓之助とハ對くの門戸、年紀も似合
きよし、弓之助ハ弱冠かまども、緊利発かるものあり、誓
ふ取て不足ハあらト、予が媒よて、婚姻申はくらせ
こ感佩御上意、弓之助が人品家風ハ從來望ところ、
殊よ、嚴命うと、けふく、早速謹諾よ、う、た、ま、
主侯よも、満足よおほすとの御意よ、て、御酒とさる

安三郎 巻五

賜さる。御勸め受けける由へ。一時高興にて歸りぞこ
あまは近日弓之助よ。黄道吉日がゑらび。納采
を贈来るべし。這方よも早く。その準備をかまへし。
と喜々よろこびたまふせ。母上ハさらぬ。闔家ご
ぞめとて祝ひてやせど。こまはそれよひをうへて。何
水の出端の嫩ごう。みもと聞てたどらき。恰どそ
ぬこのやうにおもひはれ。先ハ聞るる女心。ひとぞの
義理よ纏ひあるおもあらず。あまのやるうとぬさふ。
一夜塙を越て。隣邸よ志のびゆと。主水殿よ遇て。事の
次叙を流むら小語。おハ何とせんと氣もとる。浮
沈よせまること身のうちへ。いっふ取置たまふと。泣つ

口説つせしうちよ。主水殿も十方ふるも。一休なほか
やあまてやうさうく。おハ是非もぬき事體らな。知
るごとく。我ハおの家の螟蛉子ぬ。那方とい門戸を
相對バ。機と見て。婚議申入んと挂念し。さすがお
養母の膝下。おまわれと心ぬら。遅滞て。今日の今
といぬ。たり。嫡實の母親かまへ。こく耳小もいきて
商量ともなすべきと。かく延佇よか。おハおままで
の縁よてあまはら。まと和寮ハ君侯の御声。お
おて。夫人新羅の前の御主持とあまは。等閑ぬらぬ
重とあま。おまを全くと天よ。さづけた。因縁といふもの
ぬ。我ハ今よ。弗おもひき。侍。おハ。和御寮

安石加果 卷之五

ハ忠と孝とのため。秋月許へ燕雨ぬしたまへ我
おいてハ一点も念を遺どと。乾く浄くといひ放されし
わへ。ふまよ腹が立まいもの。たばえず艾とこへは
て。そハあまアぬる薄情おふせり。こらハ一たひ
山盟海誓ふとぬまバ。ほおひあきらむるふとハぬ
アがこし。いざあまより何處へかアとも。伴て退たす
り。さらそび今ふの坐よて。君が又ハ貫りきて死なまし
しやく手おかけて殺してたべと。種く怨かふらぬハ
登時主水どの。いしくふハ。そハ女の一途とつふとのか
ア。真情いともあるべきまとぬまども。よくく情由とこ死
まへたまへ。我ハ養子の身分。色よまどひて。義恩ふた
母ハ捨極重ぬる義家の名跡と断絶せしり。またかけ
かまハぬども。弓之助ふも。蠢巧の女と妻よしたまへと。
世上の咄をまと。ふまやうと人情のまのびどるこころぬこ。
孝義ハ天の道。色ハ人慾の私と聞。天の道と捨て人
の私とまらふとい。我ハ得せぬ不どふ。和御寮是非こ
も小死ぬんとぬらバ。早く回て。和御寮一個死たまへと。
世またのもしげぬき語ハ聞よア。あまアそのまとは掃
興て。呆まよどひて家小回ア。熟右思左想ふ。ひとり
死ぬしらふほどの薄倭郎ハ義と立ぬき。不孝ハのと
世ハ笑うも詮ぬきまとい。あのやうぬる薄倭郎ぬ
ハ。来世の契もたのぬし。憎さも憎し主水殿への

安土和泉 巻之五



憤激うとく、一向世間へ志をぬりちし、寧晉嫁して
見せんと心成決し、遂は此の家の渾家とふりしに
良人弓之助殿ハ謹嚴氣質おまへと趣多くたてしに
ふまてハ心酔郎として主水殿のこととも慕ひはまど
馴染といふものハ、まじく格別なるものにて、いつ良人弓
之助殿ハ愛憐ふり、やがて汝ハ産しぞや、その後街
心にて主水殿と行遇ふとありしかど、此の人ハ具妻と
おきて、いよく慎ふく、いよく昔の風状もせらまじ、凝
し熱もさめきまて、よくく想ふその時主水殿不休
いこまざるが、武人の深切よてありしおまへ、汝ハ、阿蘇
次郎主とハ、偕老の契成結びるとついでハ、おまへ、宇治とて

あひ見しまでのおとと明石の浦のおととバ夢小も志
らねバ、此の人ハ汝のかやう小慕やるとも志らて、今ハ
早妻むうへせらまじ、もむらまじ、をまバ下藪の云
おる、蛇の貝の行想とやらん徒ハ想屈してあたら花顔も
つろひしてん、諄言おまども、さきふもつおとく、父君の
御書ハ駒澤ハ世ハ冠絶たる風流雄おまといひ来し
たまへ、母もまた耻ともありすほどの深意をさきまへ父
母への孝行ハ、こやく舊人と想断、笑容駒澤へ花燭し
てたもと、種く小説話たてらまて、女兒深雪ハ此の長語
ハ聞顔とて得擡ず、泣きまげきてありけるが、母の庭
訓の骨髓ハ、決、やうく小涙と拭ひ、羞澁さ、勿体

天正四年 卷之五

ねと、不孝の罪を怖しく、既に母上の御語を諾ひ
 駒澤殿とやらん嫁して、御慈悲ふくまじき父君の御
 ら、ろが安堵まいらせんと、身の過を悔ひ、声もか
 とうよ謝申せば、母の水青ハふりく悦み、お出
 来せし健氣おると、扇たたく賞をやりぬりて
 復書おきたりて、さといひと好便宜ある小托て此
 風趣といひやせける、おまよりされ、鎌倉ぬる弓之助
 が僑居よ、氷人の所置よ、駒澤方よ、納幣と贈り、
 来せしうへ今又渾家水青が家書とて、女孩兒も
 異議なく承引たる趣を、おまに安堵喜まわさざ
 りぬし、さともども深雪ハ一心金石よ、堅く阿蘇次
 郎よ約し、舊盟をまもるを、おまがたの節操と水潔し
 他家へ嫁づく念ハ露むら、おまもぬく、あはをい、おまも
 おの家おまのひ出、帝都よ、ますぬる情郎よ、尋遇む
 やし、その便宜を、おまに覗ひける、前の日母よ、允容の体よ、も
 て、おまの、闔家よ、怠情とせんと、の私意おま、一タ
 深雪ハ一通の遺書おま、留り、黑夜よ、紛きて、落陵の邸お
 逃し、出、踏踏よ、帝都とこして、奔りける、おまを、色膽と
 情痴と、おまを、人、僅く破凡の深閨處子、い、うて、た、
 單く、行程萬里よ、赴くべき、水青ハ、女孩兒が遺書と見
 るよ、おま、勿心地肝潰て、人心地もぬく、慌忙人と走らせて
 追っけさせ、祈禱よ、卜筮よ、と、騒ぎ惑ひて、狼狽を、おま、

透回^{とくわい}に來^きらぬバ、今^{いま}ハ如何^{いか}ふともせんをべぬく。泣^なくみ^みの
よ一^{ひと}書^かふ^ふきたりぬ。鎌倉^{かまくら}へ使^{つか}と駛^せて、夫^{おつと}主^{しゅ}弓^{きゆう}之^の助^{すけ}へ告^{つげ}知^ち
志^し心^{しん}、弓^{きゆう}之^の助^{すけ}志^しの變^{へん}成^{じやう}とくより、呆^{うき}も果^{くわ}且^{かつ}駭^{さい}き且^{かつ}念^{ねん}す。
一^{ひと}年^{ねん}明^{めい}石^{しやく}の船^{ふね}よての風^{かぜ}状^{じやう}不^ふ得^{とく}意^いやらずと顧^{かみ}しも必^{かなら}
竟^まよもまで愛^{あい}惜^{じやく}よ溺^{おぼ}れ、その查^{せん}明^{めい}ともふさきて、姑^こ息^{そく}急^{きやく}
慢^{まん}せしこそ悔^{くわ}しけむと、ふくく臍^せ瓜^か噬^せて、悶^{もん}ぢもども甲^{かう}
斐^ひまし。こいあも今^{いま}さら駒^{こま}澤^{ざい}へ對^{たい}して、何^{なに}と謝^{しゃ}辞^じあるべ
き、こそ堂^{だう}くたる武^ぶ夫^ふの身^みとして、一^{ひと}端^{たん}誓^ち約^{やく}せしふ、ひる
みとあましと、かてり白^{しろ}く地^ちよやうとるべき、こが辱^{ちやく}門^{もん}ハ
ともあも、深^{ふか}雪^{ゆき}ゆが無^な状^{じやう}よて、當^{たう}時^じ賢^{けん}者^{しやく}といとるく駒^{こま}澤^{ざい}に
耻^ち辱^{じやく}と典^{てん}人^{にん}みと千^{せん}萬^{まん}きのどくぬましと、多^た方^{ほう}と心^{こころ}と傷^{きず}しり
右^{みぎ}思^し左^{ひだり}想^{さう}せしら、猛^{まう}然^{ぜん}一^{ひと}計^{けい}とおもひはき、こそ賢^{けん}督^{とく}の
体^{たい}面^{めん}と掩^{おほ}はんたり、一^{ひと}生^{せい}一^{ひと}度^どの虚^こ言^{げん}ばつべしと、家^{いへ}隸^{れき}ど
もよ堅^かく守^{まも}口^{くち}如^{ごと}瓶^{びん}して、臆^{おそ}使^しを差^さし、女^に孩^{がい}兒^に深^{ふか}雪^{ゆき}こと、
不^ふ意^い暴^{ぼう}よ病^{やま}て世^よが早^{はや}しとべしぬ互^{あひ}よ哀^{あは}傷^やしたへ侍^{さむら}
し、父^{ちち}のべこそ、戒^{かい}名^なをととへおくりけむバ、駒^{こま}澤^{ざい}次^じ郎^{らう}左
衛^ゑ門^{もん}あ、の訃^ふ音^{おん}と聞^きよまし、天^{てん}と仰^{あや}ひで長^{なが}嘆^{たん}し、不^ふ好^{こう}し
し、我^{われ}不^ふ肖^{せう}なまどども、騎^き長^{ちやう}として國^{くに}老^{らう}の事^{こと}と行^な
ひ、大^{たい}國^{こく}の權^{けん}柄^{へい}と掌^て握^{ぎやく}をまし、さむバ近^{ちか}日^{じつ}よ錦^{にしん}と着^きて
故^{ふる}郷^{きやう}よ歸^{かへ}まし、真^ま情^{じやう}比^ひぬき淑^{しよ}女^{にょ}と述^の好^{こう}俱^ぐよ榮^{えい}貴^きと保^{たも}
べうねもひしむ、誰^{たれ}うららん、一^{ひと}夕^{ゆふ}の枕^{まくら}席^{せき}とも共^{とも}よ
せず、條^{たう}忽^{くつ}我^{われ}と遺^いて、一^{ひと}個^こ黄^{わう}泉^{せん}の路^ぢよ赴^{おもむ}んしハ、凡^{おほ}

安宅加保 卷之五

室女ハ氣の肩ハ煩々習俗思想の餘ニ病亡一ハ憾
ひべー痛むべーと。声うち吞て。ほどく血の涙とぞ流
ける。さきハ許配の婦人不幸ありと聞て。ふのくら
又陸續縁談といひ入者駁つてけまども。次郎左衛門ハ
情人已身まうまうへハ誓て兩田填房と娶るは
こいさ死よくいひ放ちて。續絃の念ハ絶けるとふん。

十二回 晴

さても深雪ハ落陵の邸とまのび出。只管東と指て走
けるが。いつう刈萱の関の古跡とうち過。瀬松の汀をも
北見て。程ぬく鳥金磯といふ地方にいたる。這里まで
ハ晝間かくも。曉宵の仄くらを間ハ歩ける。遅索る
ものども。その影た小も看ざまけり。深雪ハまど夜深
起。蓐食て逆旅店にたらし出。志の驛の郊垠より後背
に顧まバ。五旬年紀の漢子ありて。青春廿四五とに
ぼーと婦人具一来るが。横雲の天ぬまバ。人顔ふ
ねろろげぬまど。大抵親子といふをけり。這の漢子
声とつけて。阿姐ハ獨行と見ゆるが。天照廟にぬけま
いアせらるる。洒家ハ防州あたまで行くものぬ。旅ハ
伴侶とまうせば。お伴はぬ。申べーと。懇より。深雪ハ
立をまてて。熟視る小。緊く老實さうぬる野叟あり。
深雪よりやう。正是こらう上國へのぼるもの。そまふら
令愛よてとべる。婦女どちらハ遠慮もあらざ。さあらば

小瀬川の
 深電
 死ん
 人
 と救ふ



あー同五



御行程の斜纏ともあててんと。うち迄までゆく。那の野
叟が女子めくものハ世かきたる態にて。うらぬくもかこら
ひける由へ。深雪ハふうく安堵てけり。ゆとくして。や小倉
の城下ふいと。一間の茶店ハ尻ヶけて。一盞茶時憩息ふ
ふの時那の野叟深雪ハ耳語けるハ。あまよて。那邊小
文字が閑として。旅客とあらたむる批驗所あり。小姐ハ往
来符牌ともちたす人々。深雪ハやく。こらけ。邊の起程
小て。さる支度ともぬ。侍らざ。野叟ハあまよとよくよて。
眉頭ハ卧蠶と起し。そハ不便なるふと。符牌あらざれ
ハ。這方よて水陸とも通行ことかまはず。さても不便と
ゆふぞ。深雪ハ何どく。十方よんきて黙居たり。や

あまよて野叟いへらく。好子く。あまよき手段こそわん
ぬも。酒家親子が通券ハ二人と志るせり。あまの二の字の
中。小また一点を加へて三の字とぬ。關吏とあまよき
やとくと通し。まいらせんと。そのま書加。またとら出
て。やとら關の戸ハいたす。あまの符牌と懸て何の苦もぬ
く。過をましけり。かくて深雪ハ那の親子の客人ハ從
て隼人の峽門と渉り。赤馬が關よぞ看小ける。三個ハ
あまよて早路と登ていそぐ。ほとふ。日あらざ。周防の
國小瀬川とゆ地方より。うづきぬ。這里ハたよを百戸は
わりの小村落あり。那の野叟ゆく。深雪ハ對て。這
里ハ老父郷里なま。緩く茅廬ハ逼留して。行路の

御行程の斜纏ともあててんと。うち迄までゆく。那の野
叟が女子めくものハ世かきたる態にて。うらぬくもかこら
ひける由へ。深雪ハふうく安堵てけり。ゆとくして。や小倉
の城下ふいと。一間の茶店ハ尻ヶけて。一盞茶時憩息ふ
ふの時那の野叟深雪ハ耳語けるハ。あまよて。那邊小
文字が閑として。旅客とあらたむる批驗所あり。小姐ハ往
来符牌ともちたす人々。深雪ハやく。こらけ。邊の起程
小て。さる支度ともぬ。侍らざ。野叟ハあまよとよくよて。
眉頭ハ卧蠶と起し。そハ不便なるふと。符牌あらざれ
ハ。這方よて水陸とも通行ことかまはず。さても不便と
ゆふぞ。深雪ハ何どく。十方よんきて黙居たり。や

あつたりの
文間
一北豊
翁として
意と圖せ
ざること

疲勞とも憇めたまへ。そのうちふいよき影伴も出来ぬ
浪速小舟の便とも聞出し、まゐらせんかど。ま
すく懇よかとりふ已は渠が家小来てくるま。葦封茅
の宇端まハ、おのづから胡蝶花生ていとこびり。外面
おろ打麥場ハ、雞の雛ども求食あひ。狗兒かど戯を
狂ひつ。そのこくりとる黄櫃柿の墜紅散布て、ふまど踏
ハ、電光とくと鳴。野叟ハ背戸の繩簾と一とけて入。婆
々々今歸来ハと音かへハ。早かそいと應て婆の機と
下たち鬢搔撫け出むへ。老人家什店ぞよ死鳥が
罹しりと問よ。野叟いそりきて、鳥も二羽まで獲。つ
一羽ハ價よお。さうおもの。とさや。深雪も呼入

らまで、裏頭の光景を見まはせ。庭竈よ。手桶ハ湯と
汲いまで拿來。林端よて盥盤よりつ。姐々たら
さぞか草臥たまはん。洗足したま。内房へ往寛
緩甘ぎて憇たまへと。深雪ハ農婦よ對ひて。おハ
勞汝お。一路もおまの御亭主の御勞煩よ。お侍と
挨拶して。草鞋肺絆とほどくよ。皮肉腫浮て喰い。王
たる紐の痕とへは。さたま。伴の女と共。一浴盤よて双
足とあらひ。やとら厨房よ躡あ。つ。婆ハハ笑容
可掬つく。別房よ誘ひ。おき。枕まどあて。ひ一椀の
深茶と拿來。て。いよ。おく。欺待ける。深雪ハもと。おま
深窓ま。い。か。里。萬事初く。志く。什店の心もつ。す

三三〇
卷之三

一八

さて翁媪が深切とよろあびけり。とまども伴の婦
とバ農婦が女子ふしめらぬ挨拶せる由へ。ふりく又
いぶつてあやぶむ。夫の伴の婦はもと。小支那といふ
覇臺の柳巷の遊女なる。些はまらぬ夫とのありやへ。
柳巷と出亡して小倉の方へ赴く所は偶と那の野
叟といでめひける。那の野叟は權は老實の態は扮粧
せども。従来脱圍の吉兵衛と呼り。人肉經紀の骨
長ぬ。毘とも脱る蒼狐のぶしと。狡獪きものなる由へ
土人も後よハ吉兵衛といはれず。狐兵衛くことを唱へる。
とまバ這の小支那ハ那の狐兵衛は拐撃をて伴らじ
が。小支那ハ自来遊女のふと。おまバ。あくまで騙嫖ハ

たるものゆへ。初よ。吉兵衛が圍戸といふことと猜
けまども。盤纏とへ心よま。うせぬと。おまバ。假意
とまたる風状と。お。中。就てよき計較をそ
んし。みらず顔よもて。お。這里まで従い来し
小支那ハ熟深雪が容止舉動の媳。婿たるは。極て
家の令愛なりと見て。今。も。圍戸が裏と。知て。
堵在。こと痛ハ。い。と。明の日。婆々。が。あら。ざる。閑と
ひ。深雪よ耳語てい。や。や。御身。尻端の。纖弱。さ。よ。も
十人よハ在。さ。ハ。か。く。嫩。艾。御身。よ。して。千里。獨行。と
み。ハ。さ。ま。ハ。戀。路。よ。せ。ま。ま。て。の。ふ。と。ハ。問。で。も。と。く
よ。ハ。猜。ハ。侍。る。こ。が。身。ハ。も。と。よ。ハ。往。還。の。人。ハ。折。る。

壻の花。うさ川竹のふがき小漂よひ世の浮況と看馴
しりへふの家の主翁とバとやくも四戸とい知るる
この家よ入来しもの、總て不良ぬものむり符牒とて
渠等が隠語と聞侍る小御身と高價よ活逆さんとの
頭勢ぬ王。御身今泥梨地獄よ墮たまへハ。とて解脱
たまふふといぬるがごとし、臆て鯢鯨よ筑紫の果る胡
笳吹く睦の奥小うな。賣渡とまたまひぬ人あま痛ハ
しと涙くむ。識趣ほど哀傷よ勝やと。深雪ハよ
まを聞よ。まも乍ら面土色のふとく。半晌呆て口
開くど。やあてとふ。落る涙とはらひ。ふハ惠ある
御語。る推量よたがハ。と。仔細あて。情郎

たづぬる獨旅。とて伴の野叟ハ四戸よてあてける
さあま。今ハ籠中の鳥。雲井よ回らん由しぬ。過
宿世の業よてあてはらん。もとよ。まも氷操とたてぬ
こが肚裏。とも故郷と出よ。性余ハ捨て無ものと
觀念。しはま。機よ臨。死ハ看るあと。歸がぶ。とま
覚悟。をふ。ま。看たまひぬと懷裏よ。と。出たう
護身小刀。試よ脱くるせ。明晃々たる銚の光。ハ
あざむくば。う。小支那ハ。た。ば。す。毛。簪。して。さ。す。
ハ武家の令愛君。潔よき御覺悟。と。て。死。ハ。やす。
生。ハ。う。と。やらん。ま。と。一。心。ハ。石。と。も。徹。す。と。承。ハ。了。た。る。さ。
何どせつぬる御戀路。運ハ仰靠龍天。取。了。御余。だ。あ。わ。

るぬらべ、何處どのほど小の寛家、環會たすべし。
 かるはぬまでも艱苦と志のび、身と完しておたづねあ
 へ、今日日まん主翁も、西貼壁よて、囀戸の夥伴どもと
 團豪をかゝりて飲燕一つ、今宵のうち小逃またへ、
 六の舎の後方にあとまぬる蘆垣一重ぬる、潜出たすへ
 ほどい、とらひ斫不どきて、看標の白紙と洗けたきぬん
 適間屋後よて眺やまたる小、東北よあたえて、人烟熱鬧
 き處、城下りよてねばへ侍る、那方小の官道もあてかん
 とと心當よとくたまへと、いと叮嚀よ教導よと躡よて
 深雪が鬚かどの缶ともぬと一つ、深雪はほどく悦こい
 て、ふりよ姉の好意のほど、いつの世もわらわ忘るべきとあ
 けく謝を申て雲鬢よ拂えたる印子の簪を脱とて、
 ちめておもと小支那よ與些の人情とぞ表はしける。
 かくて深雪ハ、暝やとき曠景とまぢるび、窓よて前裁
 の霜枯と眺やまば、神無月の大うた、時雨がちぬるよ
 今日も時雨うちりて、いづものあはれぬるけり、深雪ハ
 獨柱よ倚まて居たるよ、入相の鐘、岐々と遠近よ鳴度
 こや天晚の氣色孕、えむいこぬるらほをさふ、占こ
 とども城獨おち、雲井をとたる、雁の翼もうらやま
 くぞねもはる、みの時まと一陣とらくと大粒の雨と
 ちきとら、浦風おどろくま、吹流のうぶぞ、柳莖の類
 鳴とやぎて、もの冷まきことつゝむらぬし、やがて

○安七加保 卷之五

一盞の油燈と點し、婆々ハ斜對戸より風呂を呼れし
出ゆさぬ登時遊女小支那ハ深雪とひきたるいごみの
隙に遁たまへと忙したつるふど、深雪いそぐる喜ひのこ
こ。そのまゝ屋の後よまのびゆと。白紙の葉を見りしう
天の興と。やとらと破りて、王出幸うど、小渠
を越匍匐あうりて、隈はとひは走らんとするよ。天色ハ
墨とよりたるやうよ。東西とさへりさまへず。たつれも
ぬ真の間脚下ハ蘆葦叢にて。たぐ一條の反徑を、深
雪ハ杖の料よ拔しちたる、牆竹と立て、地ハ跪き、管聖
と一心よ禱す。ふの節の葉つきの倒し方と東と知ら
ぬたたまへと。念し完了、そのまゝ手と放し、葉つきの

かたをうおとがりて、ふもとたのそ只顧足よ信せて走る
ふ、ともをまば葎の刈株よて跟と傷つけ、血塗ふぬ
疼得て耐がとかいけり。時むうりあきて後背と回顧ハ
數多の炬う照し、罵り騷ぎて馳来るハ極めてこれと
まを還来るものおもと。肝魂も身よ漆ず。只走よ走ど
もとよりかよいき女の脚、追人ハ次叙よちうつきぬ。木枯の
風いよ烈しく。刹那ハ烏雲ハ吹掃せば、一籠の藪の透
よまうち戦ふ竹影ハ金屑と飾らぶとくよて、洩出る月
影よ洗し見をばいとあらハぬる寒林、疎葉大やうぬる石
儼のと儼然として立おさせ。こまハ樹躲とべき所ぬ
進退あまよ谷まよぬまバ、深雪ハ歎きてうち仰ぐ天も

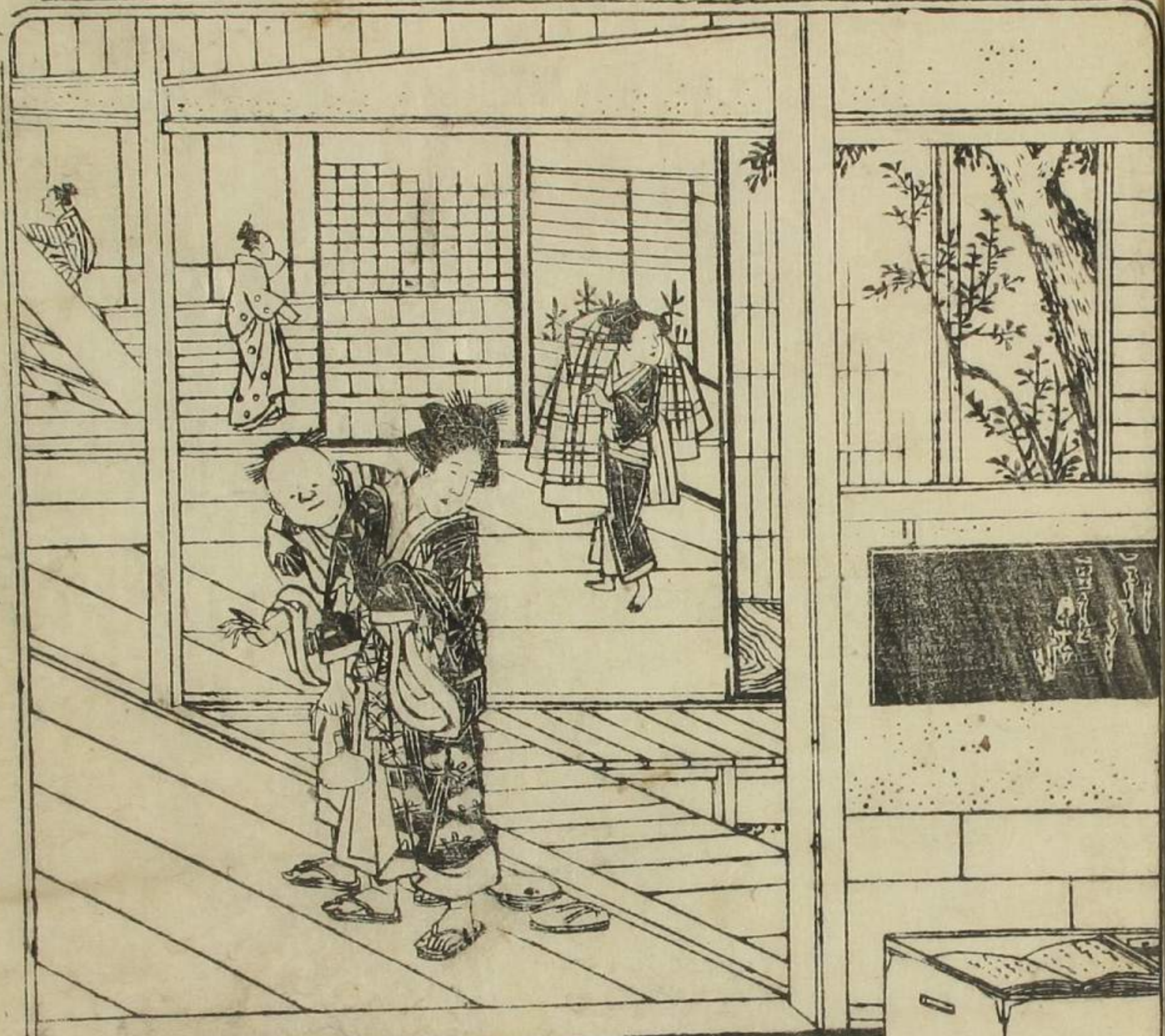
の安ん加保 卷之五

あはまゝ月蝕のまゝ一仄ぐらくおぼまゝさる。死をべき時
 小死せさまば。死まゝさる羞めまゝと懐おる短刀と搜ふ
 いつの間まゝ脱落て。今寸鐵とも佩さまばよし
 さらばおの汝よ身と沈てや死まゝし。濟曲の水の深
 慶とたづね礫と投て見ておまば。音とへたづぬ浅鹵おま
 さらば縊て死をべしと。不括とほどさて。幸と江よのぞこ
 たる柳の垂朶まゝうちかけ。園児とけらまゝ襟とまゝ阿呀
 崖よまゝ飛吊んと。南無と一声叫ぶ時。この濟曲ま候泊
 せし干簞船のありまゝ。おの船の客人ま念佛者と見えて。
 程近き村落の十夜ま泰ま。抵今まが船ま回り来り。隻
 手小提燈と提。隻手小珠數凡ぐりて。南無阿彌陀仏
 南無阿彌陀と唱へ来ま。舳舂の拍子ま。今深雪が
 南無の一声と聞縊死と看るよま。矢庭ま飛ひきて。
 抱きとり。縊繩とさへ奪ひて。月光ま照し見まば。十
 七八の麗人が。年ふる柳の下おあまて。十指合せて。縊
 繩小とヤ吊下らんとせしところおま。那の客人多方
 と深雪とおだめ。あらまゝ死をべき縁故と耳。已ま
 名所とみお。目前見殺ま。何とも痛ま。く
 忍びま。些の散財の從他。後果のため。おの老人が
 救護ま。さんと。叮嚀ま。へたはるうち。こや遅け来る
 者ども馳はきて。口く小罵ま。緊要の奇貨と捧おふ
 らんとせしとて。直ま。ひつたて。ひあどり。往人とせし。ぬ。

安元加保 卷之五

〇七三

八の右き
 小若界
 ころしめは
 たる



安七加保
 卷之五



あしな

廿四



十三

那の于翹船の客人とけ入て、種々愛い懐中の財布よ
了。金子ととり出し、那の毘脱の吉兵衛とやらせまう
三片ぐらうとと逞捕の者ども小迎典無難事と完し
深雪を伴回。船頭と呼起し、仔細あまバ早く船と出
せと催促る。船子ども心を得て、その中、鉄猫ひさあ
げ、遠つ灘へと漕出す。深雪ハ弘誓の船の扱と得て
園戸ヶ鰐の口と免りも、念佛者の老人の功德と嬉し
宛も地獄よて佛よ遇し心地せし、恰好順風つよくふ死
出せば、やがて蓬と拽あげ、五六合もたせし、唯一夜の内
數十里と走り、播磨の室津ふぞ着ふける。あの客人と
しん。この室津の迷魂陣の七八よて、夥の妓と養嫖客
と待た過活とせら、一座の花院の主翁おし、誦号と大
黒屋とし、名は吉兵衛とし、この吉兵衛ハ生を得る没
一眼からちへ、眇の吉兵衛と綿名せし。もとこの吉兵衛ハ
榎丁のふとねまバ、常々田舎経歴して、妓子買ふ罷し
う。防州小瀬川ハ、園戸女還の巢穴おまバとて、とくよう、這
の處よ来て居て、その奇貨と穿鑿せし、頃毘脱の孤
兵衛が、匂引して、兩個の女と伴来たし、密に覗ひ
相て、こや價定まり、この渡世は狡猾眇、抑巷の
落第の蒼妓ハ望まず、只處子の深雪をば、か。多方向
量とるよ、孤兵衛ハ、深雪が身價と五十兩よ、減まじ
といひとりけることをども眇ハ中く合点せず、醉齒ハ由

ある奔女^{うしめもの}取^とり。強^{まさ}て苦界^{くがい}こそせんとせば自害^{じがい}一果^{いち}て原^{もと}
價^でまでも勿^なく園^う鳥^{とり}有^あり。その説話^{せつわ}は枝葉^{えだ}つとて已^とま
破^や談^{だん}ももふるべきと。牙^か儂^{じやう}ども種^{たね}々と受^う居^ゐる時^{とき}も民^{たみ}
脱^{だつ}が婆^ばくハ晝^{ひる}間^ま小^こ支^し那^なと深^{ふか}雪^{ゆき}が耳^{みみ}語^ごめひーことを壁^{かべ}耳^{みみ}
せしう。口^{くち}舌^{じゆ}き悪^{あく}婦^ふのぬらひ。湛^{たん}らねて両^{りやう}吉^{きち}が價^{あひ}論^{ろん}の
坐^ざふこーてゆきて一^{いち}五^ご一^{いち}十^{じゆ}吉^{きち}けるゆへ鬼^きと欺^{あや}む眇^{めう}の吉^{きち}
たまははけこそそのまゝ三十^{さんじゆ}金^{ごん}は買^か落^おし。とて件^{けん}の演^{えん}
劇^{げき}と草^{くさ}曲^{まが}意^いと假^{かり}造^{ぞう}ぶとして虚^{うつら}念^{ねん}佛^{ぶつ}者^{しや}とぬきて如^{ごと}せ
し。いと這^この眇^{めう}吉^{きち}ハ夫^{つと}あり子^こある中^{ちゆう}ととへ裂^さ衣^いりて買^か
取^と種^{たね}々^々奸^{けん}計^{けい}と運^うらし。如何^{いか}なる鐵^{てつ}肝^{かん}石^{せき}心^{しん}の婦^ふ人^{にん}なり
とも。うまゝく苦^く界^{がい}は墮^だしむる老^{らう}賊^{ぞく}ぬらゆへむる造^{ぞう}て

おとして深^{ふか}雪^{ゆき}が必^{ひつ}死^しを救^{きう}ひ。ふりく恩^{おん}と擔^{たん}せ。よんどころ
ぬき義^ぎ理^りは迫^{せま}て苦^く海^{かい}は溺^なんと巧^{たく}計^{けい}しものふか。深^{ふか}雪^{ゆき}
ハかく欺^{あや}むまゝしとハ夢^む小^こも志^しらざ世^よハ慈^じ悲^ひ善^{ぜん}根^{こん}の種^{たね}
萌^も念^{ねん}佛^{ぶつ}者^{しや}もあるものうふと。たもひの外^{がわ}渠^{みち}が家^{いへ}のこま
見^みまばまこ小^こ風^{ふう}月^{げつ}場^{ばう}とおぼしめて。夥^{おほ}の姉^{あね}妹^{いもうと}の粉^{こな}頭^{あたま}と
も。ちごまゝく脂^{あぶら}粉^{こな}と凝^こし。媚^{めい}と献^{けん}し笑^{えい}と賣^うふゆへ嫖^{ひょう}客^{きゃく}
旦^{たん}夕^{せき}入^い集^{じふ}合^{ごう}ていと熱^{あつ}鬧^{なう}深^{ふか}雪^{ゆき}ハ其^{その}の光^{あかり}景^{けい}と見^みよる胸^{むね}と
うつてその薄^{うす}命^{めい}と歎^{なげ}き又^{また}しもかく行^い先^{さき}ときさる。艱^{げん}
難^{なん}は其^{その}のひくね數^{かず}回^{たい}々^々死^し路^ろと索^{もと}しうど。とふうく小^こ支^し那^な
が訓^{いん}と守^{まも}る。生^{なま}かたしとおもひ回^{くわ}し。さしこむ症^{しやう}とど
ねこへける。大^{だい}黒^{こく}屋^{やく}吉^{きち}兵^{べい}衛^{ゑい}ハ老^{らう}婆^ばのね六^{ろく}と熟^{じゆく}議^ぎを夜^や

大黒屋吉兵衛 卷五 七六

又めく度婆ふよくく吩咐けるよ、度婆ハおまを九諾
別房の籠に居たる深雪に對ひ、家主がその死と救ひ、
天大の財と費せし、恩誼のほどと口説たて、おまを償ふ
料は、半年乃至一年むらうも、苦界お出らまよ、僥倖
ある財主の半老子弟よ、梳弄のことお約束せし由と語て、
多分賺し瞞し、あるハ嚴しく催逼ふとまども、深雪ハ
一切承引ず、艶然としていふやう、おハ心お得ぬふとうか
こが一命と助けらまたるハ、慈悲ある家主の好意とこ
そおひいつま、さる佛意き言ハ聞とへ耳汚まこべるふと、
雉子搏ふる態おまハ、度婆ハ深雪に執意と恚く、只得
堅とたりて、家主夫婦おまのよと告げまハ、吉兵衛聞
よ、大さ小怒り、洒家若子の金子と費やし、頗の
辛勞して買取来しハ、全く本院の聚寶盆よせん
たりね、允ぬとて允さすよ、終らふうと、眼と念うし
て度婆と叱、おまを早く厮と羸よかし、おまふさま
削刀鍼と刺よふどく、氣喘々、鴛子ね六ハ、慌夫夫よ撐
住、かゝらざし、もとやま、おま、且雲時待たまへ
那の小姐ハ、歴々の武弁出身と見おると、強よ呵責た
ま、舌嚙切ても死うぬま、どき拳動お、さある時ハ
損よ損と累る道理ま、づ奴よ任せたまへ、今一回論
見侍てんと、漸宥り課て、己が縫房ハ、深雪を呼
せ、見まばとるやど、薦たげよ、その容止の貴よ艶く、心

のまは因果 卷之五

羞態ぞしたる。お六もやう和御寮ハ今三十金餘の價
 貨と取たまへば。そまを償ふ資あらずハ。少問苦
 界ふしたまはでハ。かろふまど。さろと公然おもひて在
 けるこそ心得ぬ。度婆どもハ鬼くまきものふて。今御寮
 小憂目と見せんと。弄ぬると。辛くてとめ侍る。和
 御寮ハそも如何ぬる人よて如何よおほさるやと。い
 溫和より問ハ。深雪回答て。ふやう。さうらうらうら
 しの女児ふて。縁故ありて。只單身。即と尋ねて都方
 へ登るもの。最その人といまど。枕ハかきとねど。一團盟約
 しく。い。水火と踏ても。偕老人とねも。ひとべる。さうま
 いう小責とたらま。縦令段々小斫まごまうとも。氷雪よ

潔よき山の身とあてり汚すべき。いつそ前の夕。益と
 死か。かくむう。可惡語ハ聞まときふ。自来死と待覚
 悟かまども。あまの家主の散財の。一個の遺憾。まもひ
 侍る。奶々。倘佛心あらば。情願債とまば。猶豫とまて。
 家主の不滿と宥らま。許して帝都へ上せと。尋る
 即ち會面し。金子ハ倍して還し。とべらん。さしあ
 ば。折角小瀬川の。汙よて必死と。さうい給。功徳も水
 小ふ。いせと。奶々の厚き底と。うで生涯忘さん。と
 涙と共に。かきらどく。却是ハ識趣の。亡ハのお六。深雪が
 真心感せし。そのふあとも。理かま。バ。快く諾ひて。い
 小。和御寮の。肚裏。あし。う。ま。いらせて。痛ハ

みそおもひ侍を。吾們の軽賤過活ハ做ども一是不
知人情ふもさうらひす。犬夫が眼前ハよきふいひふし
かるべり。斯置侍らんと。かを懇よりち語らふ。六ハ深雪
が起たらあとして。吉兵衛と相對百般と利害と解き深
雪が義烈と委く語り。那の小姐の氣象の猛し。一心
戀は凝て。石もぬきまじき貞女精神強て。迫ら
ば死と催るといふものぬき。周防の女還と捉来て。いふ
説話寸も報賽已過。這方にも影護とあまは。凌
虐あしハぬき。あの子ハ極めて世裔の愛女兒から
人。寧籠とあけて放ちや。尋ぬる人ハ遇せ。金子ハ
定て。うへさるべし。よしまと萬ハ一個粗齧たるその時ハ

奴が四季の新穿と製まひほとよ。そまはして頃損
あハ一番奴とたろ。允容て恕てやら。志やまといふ。眇の
吉兵衛ハ。いとよき事小熟せ。有名の奸獍折角小
瀬川よて。十夜歸の演劇と做せ。人と騙寸圈套。徒
ことハぬき。たまども。とてこの術て。ちやぬ。奴。倘万一
迫り殺してハ。半文錢も。しからぬ。乗除且得意の艾
婦のいふところ。緊の了簡ぬき。と一決して。一向齊整
懇切よて。放ちやる。ふま。と。意と曲て。菩薩面をつくり。
夫婦し。ろとし。種々小款待。幸よき便船と聞出。一船
工も入魂の者よて。老實かま。と。托。と。深雪
と載し。浪花まで送。羞人と。萬信く。一。經營々。

深雪もまゝと亀婆か六が庇の遭虧ふよして、奇難を免
かま、剩ふ、まゝこの懃と受り、別は臨て何とづる心
ば、その謝儀とふさんと、旅の調度と捜せども、小瀬川
は、適一時包袱遺おまつ、家と出る時、夥の人目か
忍びかね、髪飾も取る間なく、僅に家堂の櫛と印子の
簪を挿とるや、ふて奔り、別は價のゆる東西も
あらねば、唯一枚の玳瑁の櫛子と、六は與て別敬とぞ
また了ける。

朝顔日記卷之五 終

西邊美南法里江通り敷下月
百四拾三番在敷高砂善三朝

